「雲を愛する技術」

荒木健太郎　著

光文社新書，2017年12月
340頁，1,200円（税別）
ISBN 978-4-334-04329-2

著者は気鋭の雲研究者である．そして，本書を読めばわかるが，雲への愛が半端ない，無類の雲マニアでもある．一般向けの本を何冊も書いている手慣れた書き手でもある．そんな著者が，雲の知識と雲への愛をふんだんに盛り込み，先読みキャンペーンとして700名近い雲友に事前に読んでコメントをもらい出来上がったのが本書である．面白くないわけがない．

新書版でコンパクトではあるが，非常に盛りだくさんで，ある意味，欲張りな本である．雲や夕日，虹などの美しいカラー写真がふんだんに使われており，分かりやすい解説がされている．写真の多くは本人が撮ったものと思われ，それを見ているだけでも十分に楽しむことができる．雲を楽しみ雲の名前を知りたい人にはうってつけである．ただ，それだけならよくある雲の写真集と同じであるが，そこは雲研究者である．熱力学や雲物理などの基礎的な知識を，数式を使わず，パーセルくんといった親しみやすいキャラクターを登場させて，おもしろく分かりやすく解説している．そうした知識をもとに，雲の成因や虹・ハロなどの光学現象の解説，さらには気象防災に役立つ知識までを分かりやすく語る，非常に興味深い内容となっている．雲をより深く理解し楽しみたい雲愛好家はもとより，幅広い気象知識の習得や再確認したい気象技術者や気象予報士，そして予報士を目指す人にもお勧めの内容となっている．

第１章は「雲を愛するための基礎」として，大気安定度や過飽和，過冷却など，雲を理解するに必要な熱力学・雲物理の基礎，また前線や低気圧についての基本的な知識などが，数式を使わず図を駆使して解説されている．

第２章は本書のメインともいえる雲の解説である．空に浮かぶ雲が十種雲形のどれに当たるか，見た目の大きさ(視角度)を指の幅で示し，フローチャートを使って初心者にも分かるように解説されている．十種雲形の詳細分類である種，変種，副変種も網羅されている．さらに，滝や森林に現れる雲，ロケットによる夜光雲などの特殊な雲も紹介されており，興味が尽きない．

第３章では「美しい雲と空」として，夕焼けや彩雲，虹など，太陽と雲などが織りなすさまざまな光学現象が示されている．雷や太陽柱，オーロラなどもあり，どの写真もほんとに美しい．

第４章は「雲の心を読む」と題して，天気の変化を知るのに役立つ雲や，災害をもたらす雲について，写真だけでなく模式図や衛星画像なども使って解説されている．さらに，それらをもたらす気象擾乱や気象現象についても言及されており，台風や温帯低気圧だけでなく，スーパーセル，線状降水帯，竜巻，落雷といった馴染みのある気象現象についての一通りの知識が得られるようになっている．

第５章「雲への愛をもっと深める」は著者の雲への愛をもっとも感じる章である．雲と駆けっこをし，虹やブロッケン現象を自分で実際に作って見せ，スマホで雲を撮る際のちょっとしたテクニックも披露されている．そして最後には，こうした雲への愛を人に伝えることで，より多くの人に雲を楽しんでもらい，気象についてより多くを知ってもらうことで防災・減災につなげたい，との著者の思いがひしひしと伝わってくる．

本書の忘れてならないもう一つの売りは，著者自身が各章ごとに解説する動画と，雲などの興味深い映像資料が YouTube にリンクされていることである．これにより，本書をさらに理解する手助けをしてくれる．私のこの紹介記事を読むよりも，著者の本書に込めた思いや意図がもっとよく分かるだろう．ただ，一つ残念なのは，図中の文字が小さすぎて，私のような高齢者にはかなり厳しいことである．テレビＣＭでおなじみの○○ルーペが欲しくなる．よく読むと面白い解説がされているだけに残念である．

雲は空を見上げればいつでも見ることのできる，ごく身近な存在である．しかし，日頃から雲を見て楽しんでいる人は，気象研究者や気象の仕事をしている人でもあまり多くないように思う．特に，ビルの谷間の喧騒の中で日々の生活に追われていると，とてもそんな気持ちのゆとりが持てないかも知れない．しかし，むしろそんな人にこそ本書をお勧めしたい．私も本書を読み，遠い昔，丘の上に座りながら，雄大積雲がみるみる成長していく様を，感動しながら眺めていたことを思い出した．雲には不思議な魅力がある．それをこの本があらためて気づかせてくれた．

（気象予報士　瀬上哲秀）

© 2019　日本気象学会